裁判官に訴えられても困るんでね

紅葉紅葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
裁判官に訴えられても困るんでね

【Ｎコード】
Ｎ６５６２Ｙ

【作者名】
紅葉紅葉

【あらすじ】
その学校は、内閣、国会、そして裁判所に分かれている。内閣は一般的には生徒会、国会は生徒総会、裁判所は教師を表す……と、思っていた俺がバカだった。
最強知能犯を友人に持つ旭川真一は、何故か裁判長で生徒の常盤深代、許婚と名乗る柏白樺によって、裁判所側に就かされてしまう。明らかに間違っているのに真実だと思って突き進む、冤罪系青春コメディー。

case1・友人の受難

「……ここは……」

目を覚ますと、俺はなにやら真っ暗闇な部屋で椅子に縛り付けられていた。周りは何も見えない。
確か、俺は5月の高校一発目の中間試験が（二通りの意味で）終わって、友人を探そうとほっつき歩いてたところだったはず……。
あと、何か金属的なもので殴られて、意識が飛びかける中、ハプニングチュー的なものもあった気もしないでもない。いや、あれは明らかに故意だった。長かったもんな、おかげできれいに気絶出来たぜ……。

「……あれ？」

……おかしい。
こんなに立派な回送シーン入れたなら、普通は
『目覚めたか、旭川真一。これからお前を改造する』『ナ、ナンダッテーー！？』
みたいなのがあるはずなのに、人気はない、機械もない、戦闘員一号もいない、仮面男も案の定……。
これってなんかのドッキリとかじゃないのか？よくあるあれとかこれとか……

『ちょっ、あたいにはムリだよ！こーゆーの！』『何を言っている。あいつを拉致したのあんただろう。自分で処理なさい』

……何か外から聞こえる。なんか画策みたいなんがありありと聞こ

えてくるな。
……これ、聞こえちゃダメじゃね？聞こえたらダメなパターンだよねこれ？

「今北産業！」『ひっ！？聞こえてた！？』

声をかけると、やっぱりびっくりした様子で反応してきた。聞こえちゃダメなやつだったんだな理解した。外の女の子達にとっては、この古いネットスラングを知ってるかはどうでもいいようで、すぐに残酷な対応を決めるという行動に出てきた。なかなかのSだな。

『ほらさっさと行けや！』『いてっ！いやぁ…！きゃんっ！』

少し光が差し込んだ後、誰かが蹴りこまれ、また真っ暗闇に戻った。がちゃっという残酷な音、鍵の閉まる音が聞こえる。対応というには余りにも非道、かつ、最も精神崩壊には効果的な拷問手段。
そう、監禁だ。
担当者は女の子らしいのがまだ救いだが。いや救いじゃねぇよ、Sだったら死亡のお知らせが流れるだろ。蹴られ、殴られ、逆レイプ……最後以外いやだ、最後のやつだけしてください。

「あ、ドア閉めないでよー！ふかまよー！怖い、怖いよー！助けてー！」

確実にSじゃあないっぽい女の子の悲鳴が聞こえる。悔しいのか、嬉しいのか、俺は何故か舌打ちをした。閉所恐怖症か、あるいは暗所恐怖症か、女の子はドアをがんがん叩くが、外の仲間は高笑いする。これ俺じゃなくて女の子への罰ゲームｅｔｃ……じゃね？

『そいつを解放したら？電気くらいならつけてくれるぞ。さて、ど』

「怖い怖い怖い怖い怖いよー！電気！電気電気電気つけてー！」

女の子の悲鳴は続く。

『電気は内側』「ふぇぇぇん！ふかまよのバカァァァァ！怖いよおぉぉー！」『……白樺の声……きゃわいい……襲いたくなっちゃうかも……（＊д＊）ハァハァ』

ダメだ向こう。腐ってる。百合万歳……じゃないや。

とりあえず俺はこの縄を抜け出さないと何もならん、俺に何も変化がない！

このままだと叫んでる女の子が可愛かったとき、何も性的な……もとい、お互いを温めあうこともできないじゃないか！

必死に手をバタバタし、椅子を揺らす、脱出方法？んなもん知るか！

そんな時、

「ひぁぁぁー！かしゃっ、今っ、かしゃって、かしゃっかっかしゃっ、かしゃかしゃ…ふぇぇ……あたいもうこんなのやだよぉ……」

いきなり可愛い声がこだまする。かしゃ、かしゃ……何の音なのやら、もうちょっとエロティックに……

……

もしや、俺が足を動かした時に当たった紙の音か！？

どんだけ聴覚いいんだか、とりあえずもう一回バタバタしとくか。

かしゃ……かしゃ……

「い、いやぁぁぁ！」

もう頭の中では悶える女の子の図でいっぱいだ、つまり妄想ですね

わかります。とりあえず声をかけてみよう。全てはそこから始まるというのが鉄則。

「……大丈夫か？」

「……ふぇ？旭川くん？」

やべぇかわいい声出すな。涙声交じりで名前呼びは反則過ぎる。段階だ、こういうのは段階が重要なんだ。灰色でも真っ黒でもなんでもいい、段階だ。

「……名前は？」

……閃いた段階が余りにもストレート過ぎた。

どうした俺、ギャルゲーで磨いた落としテクはどこへ行ったんだ俺！

「あたいは……柏白樺。かしわ、しらかば」

「顔、見せてよ。電気をつけてさ」

「電気って……どこ？あっ……これか」

ぱちっ

ストレート過ぎた段階のせいで電気がついた。

利益なのか、不利益なのか今の俺には判別出来ない。多分不利益だろうな。

まあとりあえず電気がついたなら安心だ。電気は本当に安心感を与えてくれる。

ここは見たところ……談話室みたいだ。どこかの部室だろうか、書

類が散乱し、本棚はファイルで埋め尽くされている。視力があまり良くないので、何かは判別できない。
ただ、テレビが3台とか、パソコンが5台とかあるのは確認出来た。なんか映像とかの同好会なんだろう。
そして、部屋の隅の椅子に俺は縛り付けられていた。対角の位置にある電気のスイッチに、柏白樺はいた。

柏白樺……可愛い。
セミロングの茶髪に、エメラルドのように光る緑の目、肌は雪のように白く、暗所の怖さに震えるその姿は小鹿のように弱々しい。
涙目でこちらを見つめられると……守ってあげたい。そんな感情が沸く。

「うう……旭川くん……」

がくがく震えながら、こっちに近づいてくる柏。警戒しているのか、ブレーカーが落ちるのが怖いのか。
とにかく落ち着かない感じがある。

「何で俺を縛ったんだよ」

「……旭川くんは、鎌倉繍と一緒にいるんでしょ……？尋問のためだよ……」

じ、尋問……なかなかえげつないことを言うな……。ちなみに鎌倉繍、かまくらしゅう、ってのは、俺の戦友であり、悪友であり、学校一の問題児だ。成績とかは問題無いが、知能犯として有名になっている。
中三の時の修学旅行で、伝説の女子風呂場のぞき見を達成した残念

な人。
今は二次元へ堕ちてるが、いや俺が堕としたんだが、またいつ覚醒するかわからない。もしかしたら三次元の美少女達に襲いかかりはじめるかも全く分からん。
そんな奴の情報を友人を尋問してまで手に入れたいというのはよく分かるが……

「手に入れてどうするの」

今のは推論の域を越えられない。所詮、推論だ。
まだ何の役に立つかも分からないのに、友人を拿捕するリスクを犯してまで……そんな価値はないだろ。

「ええっと……それは」『それは私から説明する』

っとここでさっきの百合女が登場か……。鍵の開く音が響き、ドアが開く。
尋問が本格化してきたな。
堂々と、どや顔で入ってきた女の子は、黒髪で、ポニーテールで、なかなかの体つきをしてんのに百合……けしからんもうちょっと柏を虐めてやれ。いっそのこと俺が虐めてやろうか。
じゃない違った間違えた。尋問って何されるんだ？
下半身産業に強制従事させられるくらいだったら喜ぶけどな……違うよな……。

「なんだよ」

「まず、旭川真一。部活には入ってないよな？」

……なにそれ、部活なんてどうでもいいだろ。
繍のことなら教えるから、さっさと解放しろ。

「興味もなさそうだ」「んなもん勝手にさせろよ」

「まぁまぁ、とりあえずこの会に入れ。活動に精進し、我が永遠の宿敵、鎌倉繍を倒すのだ！」

鎌倉繍が永遠の宿敵ね……あいつ強姦でもしたのか？やりかねない感じあり……まさか、
手遅れだったか……チッ、先を越されたぜ……。
じゃ、友としてあいつを正しい道へ引っ張り出すこともやってやらなくちゃいけねぇのか……面倒臭い……
……活動に精進？

「……ここは何部なんだ」

「よくぞ聞いてくれたな。白樺、私達の勝ちだ」

……勝ち？

「待て、入部した訳じゃ」「旭川くんおめでとー、あたい達やっぱり運命の赤い糸で結ばれてたんだよー。あたい許婚だからね～」

……赤い糸？許婚？
さっきからよく聞かない単語ばっかり出てくるな。
俺の語彙力が足りないのかそーかそーか……
絶対違う！許婚の意味くらい知ってるし！問題は理由とかそこらへんじゃない！

「……は？許婚？柏、お前それどういい」「ようこそ、裁判所へ。私が裁判所長の常盤深代、ときわふかまよだ、よろしく」「さ、裁判所書記の柏白樺ですっ、よろしく……ね」

こうやって、高校生活は二次元的なものになるのか。なんて不条理なんだか……

ｃａｓｅ２・悪友が悲愴

この学校は３つに分かれている。
まず１つが『国会』。
これは生徒全員をさしていて、普通の学校では生徒総会という名前だ。
そして『内閣』。
生徒会ですねわかります。ここの権力はでかい。
で、最後に『裁判所』。
これに関しては秘密にされていて、噂の上では先生をさすんじゃないかということだった。実際に先生は、教師手帳を闇魔帳と呼ぶように、生徒指導を裁判と呼んでたし、その噂が定着するのは時間の問題だった。

しかし、裁判所はしっかり生徒の管轄だったのだ。
目の前に、裁判長と書記がいる。

「旭川真一、お前は裁判官だ。明日からここ、第３談話室へ来るんだな」

明らかに言動がダメ人間系の裁判長、常盤深代。

「あたいは許婚だからねー逃げられないよー……」

勝手に許婚宣言をしたのが書記、柏白樺。
とりあえずここまでは分かった。そしてこれしか分かってない。謎しかない。
何故俺を監禁した、仕事なんだ、許婚ってなんぞや、何故解放してくれないｅｔｃ……。

「なんで解放しないんだ」

「希代の犯罪者、鎌倉繍の右腕にして最強の戦略家、旭川真一……。お前のせいで何人の女生徒が涙を流したと」「多分それ繍が垂れ流したデマ」「は？」

……やはり繍のせいか。

何かにつけて俺が責任を持つことが沢山ある、だいたいなすりつけだけど。今回もそれだろうな。

「デマ……」

「繍がそんな簡単に本当の情報を漏らすわけないだろ、まあ俺もだけど。ちなみに俺はただの友人だから」

繍のすごいところは情報能力の高さだろうな、あいつが知らないのは未来くらいだと思う。

「今、鎌倉繍は……どこに……」

「簡単に見つけられるよ。ただ気付かないだけ」

そう、気付けないだけだ。なんたってあいつは有名人だからな。学校に普通に来てる時点でばれる。実際授業中は普通にいる。だけど授業が終わったらもう誰も気付けない。ステルス性能高すぎワロタとか言わないであげて、可哀相だから。

「そんなはずは……確かに写真もないけど」「あいつの前なら常識は捨てたほうがいい」

かっこいいことが久しぶりに言えて満足する俺とは正反対の表情をしていて大変よろしい。じゃ帰るか、もう6時過ぎだし。

「帰るから」「待て、お前は監視下に置く。白樺！」

……監視下って……あのよくあるパターンのあれですか。すごいな、本当。

「許婚として……最大限ご奉仕するよ……！」

ご奉仕ってなんだいってエロい意味で聞こうとした俺を誰か殺してくれ。

という訳で、寮に帰ってきた。

個室8畳間、トイレはついているが風呂とキッチンは共用、家具は備え付け。

これで破格の13000円なんだから楽だ。よって財布に余裕が出来る。それにより、大量のゲーム、本、グッズが積み重なっているのが俺の部屋だが……

「ここが男子寮……不思議な空間だねー……」

後ろに美少女が引っ付いている影響で全くリラックス出来ない。アニメも見れないゲームも出来ない……。ぼーっとするしかない……

「……旭川くんー！」「え？あ、はいはいコーヒーね？今挽くから待ってて」

慌ててコーヒーをつくる。だが不服そうだ。何故だ！坊やだから……じゃない嬢ちゃんだからさ！

……本気で不服そうだ。

「いやそうじゃないよー……あたい許婚なんだよ？」

だから許婚ってなんなの。俺の考える許婚っていうのは親によって無理矢理結婚を決められるあれだ。

俺は孤児だからそんなものないはずだぞ。

「何が許婚なんだよ」

「結婚を約束してるの！」「ほうほう、結婚を約束してるって？まさか敵と内通してるなんざ思いもよらんってよ？」「……え？」

何やら聞きたくない声が聞こえた気がした。無視。

「約束した覚えはないんだけどなぁ……そうだ、コーヒーはブラック派？微糖派？カフェオレ派？」

「え？あ～……微糖で～」「……無視か、なかなか酷いなお前ら」

微糖派の女の子とはな……気が合いそうだ。最初はやっぱりドキドキしたけどそこまで問題じゃなさそう。さてどうやってエッチに持ち込むか……

「この人はー……？」

「ようやく触れ」「別にどうってことない奴、無視でいいから」「をい」

だから放置プレイが楽しいんだろうが、気付けよ。

「……怪しいにおいがする……ふかまよー！来てー！変な人がいるー！」

へ、変な人って……初見から扱い酷すぎるだろ。

「酷い言われようだな」

「……グスッ」

それから約３０秒後、

「何だ白樺……私は巡回をしてたんだぞ……意外と大富豪が楽しかった。全敗だったが……」

常盤も来た……大富豪やってたって……ああ二川の部屋に行っちゃったんだな。そりゃテーブルゲーム最強の男に挑んだら楽しく負けるだろ……。

……というかこいつらなんで俺をここまで見張り倒すんだ……！

エロゲが出来ねぇじゃねぇか！少しは考えてくれ！

「……可愛いあなた、名前は？」

読者には１００％ばれてる奴に常盤が詰問する。

「鎌倉繍って言うんだな」
ふっつーに言い放ったよ。いつも通りふっつーに言い放ちやがったよこいつ。
「ふ～ん……え？」
鎌倉繍は、常識にとらわれず、大胆に動き、かつ気付かれない。それの原因となっているものが性別。
繍は、女であるが、心は男という、根っからの男だ。
容姿が男だと思って探してんのがいけないんだ。
友人とじゃ男として、外じゃ女として振る舞えばほとんど分からないからな。
だから常識捨てろって言ったんだ。ちゃんとヒントは与えてんだぜ俺は？
「う……嘘だ……こんな襲いたくなる女の子が……鎌倉繍だなんて……」
「残念だなぁ。信じてくれたら、俺、なんでもしてあげるのになぁ」
「信じる！……あれ……信じたら女の子が鎌倉繍になるな。信じなかったら何も出来ない……信じる……信じない……う～どっちだ～……」
そこ悩むか？悩むか。
まあいいよ俺しらね。
「ふかまよー！あたいは信じられないよー！嘘だー！絶対嘘だー！」

横から柏が嘘だコールをしてきた。嘘だったら矛盾することが結構あると思ってたんだが、あんまりない。

「え……」「アッハッハッ！繍ざまぁｗｗｗｗ」

呆然とする繍の隣でげらげら笑う俺の図を不可思議な目で見つめる柏と常盤。

「……そうだな、信じない！という訳で、帰れ」

さっきの欲望に満ち溢れた目から一転、冷酷な目線で繍を見る常盤。

「……はい？」

「襲わせてくれないなら帰れ！」

繍の襟を掴み、引っ張って窓の外へ……え？窓の外？待て待てここは3階だ。

「え……ちょ……まさかここまで存在否定されああぁぁぁぁぁ～……」

遠くなっていく叫び声。

あいつ本当無念だな……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6562y/

裁判官に訴えられても困るんでね

2011年11月21日21時39分発行